

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
名瀬地区	宮古崎	60%	白化なし。2022年は白化率70%(死滅率0%)であった。 波当たりが強く、ハナヤサイサンゴ属が優占。被覆状のニオウミドリイシや直径20cm程度のミドリイシ属小型群体もみられる。健全なサンゴ群集が保たれている。昨年の白化で死滅群体はみられなかった。 被度は昨年度と同様60%。
	宮古崎東	30%	白化なし。2022年は白化率70%(死滅率5%未満)であった。 2007年まで大量発生していたオニヒトデ食害により礁斜面下部のサンゴは壊滅状態だが、礁縁部に直径30～50cmの群体が散見できる。2022年は全体の30%が白化し、一部は死滅したと思われる。被度は昨年度50%から30%に減少した。
	デン浜	60%	白化なし。2022年は白化率70%(死滅率0%)であった。 2007年まで大量発生していたオニヒトデ食害により礁斜面下部のサンゴは壊滅し、浜中央の水路付近に卓状ミドリイシ類が残る。大きいもので直径60～80cmほどに成長している。周辺でも新規加入のサンゴが多くなってきている。被度は昨年度80%から60%に減少した。
	知名瀬大浜	40%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率5%未満)であった。 2007年まで大量発生していたオニヒトデにより礁斜面のサンゴは壊滅状態であったが、周辺海域と比較し、新規加入のミドリイシ属が多く、小型群体が散見できる。多い所では1平方メートルあたり10群体以上の群体がみられる。被度は昨年度70%から40%に減少した。
	大浜	30%	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率5%未満)であった。 礁縁にはミドリイシ属の小型群体が生存し直径30～50cmほどの群体が多い。2022年度は全体の90%が白化し5%未満の群体が死滅していた。被度は昨年度同様に30%であった。
	摺子崎	30%	白化なし。2022年は白化率30%(死滅率0%)であった。 2007年まで大量発生していたオニヒトデにより礁斜面のサンゴはほぼ全滅。礁縁にハナヤサイサンゴ属が優占しているが、ミドリイシ属の小型群体も多くみられる。直径20～30cmほどの群体が多い。昨年度は全体の30%が白化、死滅群体はみられなかった。被度は昨年度同様に30%であった。
	赤崎	70%	白化なし。2022年も白化の発生はなかった。 1998年に発生した大規模な白化現象によりサンゴは壊滅。新規加入が少なく回復が遅れていたが、今年度は直径20～50cmの卓状および指状ミドリイシが散見。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度60%から70%に増加。
	名瀬湾立神	50%	白化なし。2022年は白化率5%未満(死滅率0%)であった。 1997年の台風や1998年の白化現象により卓状ミドリイシ群落は壊滅。2010年から小型群体もまばらにみられるようになってきている。直径は20～50cm程度の指状ミドリイシ属群体が多い。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度60%から50%に減少した。
	山羊島	40%	白化なし。2022年は白化率5%未満(死滅率0%)であった。 ハマサンゴ属が優占。大型の塊状ハマサンゴ群体が点在し、枝状のユビエダハマサンゴ群落が広がるが、破損部分も多くみられる。ミドリイシ属は極僅かにみられる。透視度は10m程度でシルトが堆積している。被度は昨年度同様に40%であった。
	キョンナ	40%	白化なし。2022年も白化はみられなかった。 1998年白化現象で壊滅後、2006年に被度10%まで回復してきたが、2007年にオニヒトデにより再び壊滅した。サンゴは急速に回復がみられ、直径20cm～40cmの卓状および指状ミドリイシ属群体が散見できる。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度同様40%。
	有良	40%	白化なし。2022年も白化はみられなかった。 98年の白化から回復がみられ始めた2006年に被度15%だったが、2007年に大量発生したオニヒトデによりほぼ全滅。ミドリイシ属の小型群体やハナヤサイサンゴがまばらにみられる。直径10～30cm程度の指状ミドリイシが多い。サンゴの新規加入が少ない。被度は昨年度30%から40%に増加。
	芦花部	25%	白化なし。2022年も白化はみられなかった。 98年の白化から回復がみられ始めた2006年に被度5%だったが、2007年に大量発生したオニヒトデによりほぼ全滅。直径10～40cm程度のミドリイシ属群体やハナヤサイサンゴがみられる。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度同様25%であった。
	摺子崎礁池	5%未満	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率30%)であった。 かつて優占していたコモンサンゴ群落は壊滅し、塊状のハナガササンゴの小群落や、塊状ハマサンゴが点在する。ショウガサンゴの小型群体が散見できたが、ミドリイシ属の新規加入は、ほとんど見られない。昨年の白化による死滅群体もみられた。被度は昨年度同様5%未満であった。

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
協議会	摺子崎礁原	5%未満	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率50%)であった。卓状ミドリイシ属が優占。2007年まで大量発生したオニヒトデのリーフ内への進入を阻止し、サンゴを保全できた海域。直径50～70cmに成長した卓状ミドリイシや被覆状コモンサンゴ類がみられる。白化により半数は死滅していた。被度は昨年度5%から5%未満に減少した。
	大浜礁池	5%未満	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率20%)であった。2017年夏期高温による白化で90%が白化し2017年11月には、白化により全体の8割が死滅した。その後も死滅は続いた。被度は2017年80%から2018年度5%未満に大幅に減少した。被度は昨年度同様5%未満であった。
	大浜礁原	20%	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率30%)であった。2007年まで大量発生していたオニヒトデ食害により礁斜面のサンゴはほぼ全滅したが、駆除等により礁原では全滅は免れ、卓状および指状ミドリイシ属が優占。大浜礁池では2017年の白化により9割以上のサンゴ群体が死滅したが、礁原では死滅群体は小數であった。被度は昨年30%から20%に減少した。
	崎原東	75%	白化なし。2022年は白化率20%(死滅率0%)であった。卓状のクシハダミドリイシが優占。離礁上部は大型のクシハダミドリイシ群体に覆われている。樹枝状のヤスリミドリイシ大型群体も少数みられる。昨年調査時に全体の20%が白化していた。被度は昨年度80%から75%に減少した。
	崎原南	20%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率0%)であった。2007年にオニヒトデの食害を受けた樹枝状ミドリイシ群落の回復が進んでいたが、2010年10月の奄美豪雨災害、2011年11月の奄美大島南部豪雨による泥土の堆積があり被度は減少。樹枝状のミドリイシ属と塊状ハマサンゴが優占する。被度は昨年同様30%から20%に減少した。
	仲干瀬崎(小湊南)	80%	白化なし。2022年は白化率5%未満(死滅率0%)であった。礁縁にはハナヤサイサンゴ群集が一面に広がり、礁斜面上部ではウスエダミドリイシやスゲミドリイシ等のコリンボース状のミドリイシ属小型群体も増加している。潮通しも良く順調に回復してきている。白化群体やオニヒトデ食痕、台風による破損もみられなかった。被度は昨年度同様80%であった。
住用地区	高浜東	60%	白化なし。2022年は白化率70%(死滅率0%)であった。礁縁上部に卓状ミドリイシ属の大型群体が広がる。直径2m以上のクシハダミドリイシや直径1m以上のコビミドリイシの大型群体がみられる。被度は昨年度同様
	高浜	60%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率0%)であった。礁縁部に直径40～60cmの指状および卓状ミドリイシ群体指状ミドリイシ属群体がみられる。被度は昨年度同様60%。
	鳩ノ崎	10%	白化なし。2022年は白化率50%(死滅率0%)であった。礁原上にはハマサンゴ、キクメイシ類、ショウガサンゴの小型群体が点在し、海底に大型ハマサンゴ群体が点在する。昨年は礁原上の群体は80%が白化していたが、死滅群体はみられず、ハマサンゴでは白化群体はみられなかった。シルトの堆積があり透視度10m以下。被度は昨年度同様で10%程度。
	スタルトピラ	40%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率0%)であった。湾奥小滝からスタルトピラに続く小規模なサンゴ礁。礁縁にコビミドリイシやクシハダミドリイシ等の卓状ミドリイシの群体がみられる。全体の80%に色が薄くなる程度の白化がみられたが、死滅群体はなかった。被度は昨年度同様40%。
	トピラ	5%	白化なし。2022年は白化率5%未満(死滅率0%)であった。2010年奄美豪雨災害により海底やサンゴ群体上に泥土が堆積し70%が白化うち約半数が死滅し、生サンゴ被度は30%から10%に減少。2011年の北部豪雨では影響は軽微であったが、2011年11月2日の南部豪雨後には、再び泥土が堆積し白化群体がみられた。2015年梅雨時期に土砂の流出が発生し10cm程度の泥土の堆積みられたが、大部分は台風により洗い流された。2017年夏期の高海水温によると思われる白化群体が散見、白化率は50%で被度は2016年10%から5%未満に減少。今年度はトピラ島側のサンゴ群集周辺の海底には泥土の堆積はみられなかった。被度は昨年度10%から5%に減少した。新規加入のサンゴは少ない状態が続いている。
	和瀬	30%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率0%)であった。2013年に白化や台風で被度は40%から30%へ減少し、2014年度は台風による破損により被度が低下、2016年は大型の塊状ハマサンゴも白化し部分死滅した。2017年はハナヤサイサンゴ類や樹枝状ミドリイシ群落が白化。2020年8月に樹枝状ミドリイシ群体が部分白化した。昨年は全体の80%に色が薄くなる程度の白化がみられたが死滅はなく、被度は昨年度同様30%であった。
	赤木名	30%	白化なし。2022年も白化率0%であった。赤木名港地先の塊状ハマサンゴ群落。ハマサンゴが優先し、群種全体の9割以上を占める。その他はキクメイシ属やハナガササンゴ属の群体が点在。ウスエダミドリイシ群体も少数みられる。被度は昨年度同様30%であった。
前肥田	70%	白化なし。2022年も白化率0%であった。ユビエダハマサンゴ群落が2016年の部分白化により死滅したが、その後回復がみられる。樹枝状ミドリイシ属群体も少数みられる。今年度は白化はなく、被度は昨年度同様70%であった。	

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
笠利地区	赤木名立神	50%	白化なし。2022年も白化率0%であった。 2017年はハナヤサイサンゴ群体は殆どが白化、ミドリイシ類も色が薄い軽度の白化群体が多く見られた。1998年にサンゴの白化現象によってサンゴは壊滅したが、2009年から小型群体が散見できるようになった。被度は昨年度同様に50%。
	蒲生崎入口	15%	白化なし。オオウミキノコやバラウネタケ等、ウミサカ科のソフトコーラル類が優占。直径10～20cmのミドリイシ属やキクメイシ科の小型群体も散見できる。種の多様性は高い。生サンゴ被度は昨年度同様に15%であった。
	蒲生崎	25%	白化なし。2022年も白化率0%であった。 蒲生崎周辺でサンゴの小型群体が多い海域。直径20～30cm程度の指状ミドリイシ属の小型群体が散見できる。オヤユビミドリイシやコユビミドリイシ、ハナヤサイサンゴが多い。被度は昨年同様15%から25%に増加した。
	佐仁	70%	白化なし。2022年も白化率0%であった。 笠利半島西海岸においてサンゴの回復が特に順調な海域。直径50～60cmに成長した指状ミドリイシ属群体もみられる。波当たりが強く、被覆状のニオウミドリイシも多い。礁斜面では樹枝状のアオサンゴ小群落点が点在している。サンゴ被度は昨年度同様に70%であった。
	用海岸	60%	白化なし。2022年は白化率10%(死滅率0%)であった。 笠利半島東海岸においてサンゴの回復が特に良好な海域。卓状および枝状のミドリイシ属の小型群体が多くみられる。南側の縁脚には卓状のクシハダミドリイシ、ウスエダミドリイシ群体、北側の縁脚には樹枝状のアオサンゴ小群落点が点在。種多様性も高い。被度は昨年度70%から60%に減少した。
	あやまる岬	60%	白化なし。2022年は白化率30%(死滅率0%)であった。 礁斜面がほぼ垂直に落ち込む地形で、礁縁に卓状ミドリイシがみられる。直径40～60cmほどのクシハダミドリイシやコユビミドリイシが多い。太枝状のヤスリミドリイシもみられる。被度は昨年同様60%であった。
	明神崎	70%	白化なし。2022年は白化率90%(始末率0%)であった。 波当たりが強い礁縁にハナヤサイサンゴ科の群落広がる。スゲミドリイシ、コユビミドリイシなどの小型群体も散見できる。水路部には直径1mほどの卓状ミドリイシ類もみられる。昨年より多くのサンゴが死滅し、被度は昨年度70%から15%に減少した。
	用安	5%未満	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率30%)であった。 水路北側の礁縁。直径20cmほどの指状ミドリイシ類の小型群体が多い。直径1mほどのクシハダミドリイシもみられる。新規加入のミドリイシ属のサンゴはやや少ない。昨年の白化によるサンゴの死滅により、被度は昨年度10%から5%未満に減少した。
	節田	40%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率10%)であった。 礁縁から礁斜面にかけて、クシハダミドリイシ、コユビミドリイシを中心に卓状ミドリイシ群落広がる。直径1.5mほどの大型群体もみられる。新規加入のミドリイシ類も多い。昨年の白化による死滅により、被度は昨年度70%から40%に減少した。
	神の子	75%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率5%未満)であった。 礁池内に広がる枝状のトゲエダコモンサンゴや葉状のチヂミウスコモンサンゴ群落。2019年は群落の80%が色が薄くなる軽度の白化が見られたが、白化による死滅は確認できなかった。昨年の白化の影響も軽微であった。被度は昨年度同様に75%であった。
	今里沖	25%	白化なし。昨年度は色が薄くなる程度の白化群体が全体の50%程度で死滅群体はみられたが、死滅は無かったようである。2004年前後のオニヒトデの大発生によりサンゴは壊滅したが、その後定着があり、ハナヤサイサンゴやミドリイシ属の小型群体がみられる。新規加入のサンゴが少ない状態が続いている。被度は昨年度15%から25%に増加した。
	今里小浜	20%	白化なし。昨年度は白化率80%(死亡率5%未満)であった。コユビミドリイシ等のミドリイシ属小型群体が成長してきている。卓状ミドリイシ小型群体も少数みられる。サンゴ岩表面は付着藻類に覆われ、サンゴの新規加入は少ない。オニヒトデ食痕はみられなかった。昨年度白化の影響で被度は昨年度25%から20%に減少した。
	志戸勤コモリ	20%	白化なし。礁原上にある直径約50m、水深約10mのすりばち状の窪み(コモリ)。2022年に浅所のヤツデアナサンゴモドキがほぼ全て白化し約半数が死滅、深所のミドリイシ群落は白化はみられなかった。フトエダミドリイシやMontipora mactanensisなど、周辺海域にあまりみられない種も生存する。被度は昨年度同様20%程度。
	志戸勤礁池	5%	白化なし。コモリから陸側に広がる礁池では、樹枝状ミドリイシの小型群体がまばらにみられる。直径30cm程度のウスエダミドリイシ等もみられる。2017年、2018年の白化により被度は減少し、2022年も90%が白化し、一部が死滅した。被度は昨年度10%から5%に減少した。
	名音沖	80%	白化なし。2022年は白化率30%であったが、死滅はなかった。直径30～80cm程度のミドリイシ属の卓状群体が散見できる。卓状のクシハダミドリイシが優占し、コユビミドリイシやオヤユビミドリイシ等のコリンボース状の群体も多い。被度は昨年度同様80%であった。 <b>国直海域、毛障海域と併せてオニヒトデ駆除海域(保全海域)に選定すべきである。</b>

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
協議会 大和村	名音隧道	80%	白化なし。2022年は白化率50%(死滅率0%)であった。 2005～2006年のオニヒトデ大量発生によりサンゴは壊滅し、その後回復がみられている。クシハダミドリイシやコユビミドリイシ、オヤユビミドリイシが多く、海底を覆い尽くすように急速に加回復してきている。被度は昨年度同様に80%であった。
	ヒエン浜中央	20%	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率10%)であった。 クシハダミドリイシやヤスリミドリイシ、オヤユビミドリイシ等のミドリイシ属の直径1m程度の大型群体が少数みられるが、新規加入のミドリイシは少ない。2005～2006年のオニヒトデ大量発生したが、集中的な駆除により全滅は免れている。被度は昨年度10%から20%に増加した。
	ヒエン浜戸側	15%	白化なし。2022年は白化率80%(死滅率0%)であった。 クシハダミドリイシやヤスリミドリイシ等のミドリイシ属の大型群体が少数みられる。ミドリイシ属の小型群体も散見できるが、加入数は少ない。2005～2006年のオニヒトデ大量発生したが、集中的な駆除により全滅は免れている。被度は昨年度25%から15%に減少した。
	ヒエン浜礁地	5%未満	今年度も海況不良により未調査(2021年度) 礁縁では、半球状のリウキュウノウサンゴが散見できる。指状ミドリイシ属の小型群体が少数みられるが、礁池では塊状ハマサンゴが少数みられる程度で、サンゴの加入がほとんどない状態。被度は5%未満。
	大山崎西浜	30%	白化なし。2022年は白化率70%(死滅率10%)であった。 直径10～30cm程度の指状ミドリイシ属やハナヤサイサンゴの小型群体がみられる。卓状ミドリイシの小型群体やキクメイン科の小型群体もみられる。被度は昨年度20%から30%に増加した。
	トルス	20%	白化なし。2022年は白化率30%(死滅率0%)であった。 直径10～30cmのコユビミドリイシやクシハダミドリイシ等のミドリイシ属群体が優占する。ハナヤサイサンゴも散見。被度は昨年度同様に20%。
	マッコ	35%	白化なし。2022年度は白化率30%(死滅率0%)であった。 直径10～20cm程度のコユビミドリイシやオヤユビミドリイシ等の指状ミドリイシ属小型群体が散見できる。潮通しもよくサンゴ群体は概ね健全な状態である。被度は昨年度30%から35%に増加した。
	石川	40%	白化なし。2022年度は白化率30%(死滅率0%)であった。 卓状および指状のミドリイシ属が優占し、卓状の大型群体(直径60～80cm程度)も散見できるようになった。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度30%から40%に増加した。
	親川	50%	白化なし。2022年度は白化率40%(死滅率0%)であった。 直径20～60cm程度の指状および卓状ミドリイシ属の群体や、ハナヤサイサンゴが見られる。礁原にはリウキュウノウサンゴ群落が広がる。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。被度は昨年度40%から50%に増加した。
	宮古崎	45%	白化なし。2022年度は白化率50%(死滅率5%未満)であった。 直径20～50cm程度の指状および卓状のミドリイシ属群体が多い。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。2022年度の白化の影響により被度は昨年度60%から45%に減少した。
	国直北	90%	白化なし。2022年度は白化率70%(死滅率5%未満)であった。 国直集落北側の砂浜前面に広がるサンゴ礁。1998年のサンゴの白化現象によりサンゴは壊滅し、2010年度から小型群体が多くみられるようになり、被度はH23年度5%、H24年度10%、H25年度20%、H26年度50%、H27年度70%、H29年度80%、R3年度85%と増加した。2022年度は90%と微増し、今年度も同様に90%であった。
	国直	80%	白化なし。2022年は白化率30%(死滅率5%未満)であった。 1998年のサンゴの白化現象によりサンゴは壊滅し2010年度からミドリイシ属の小型群体が散見できるようになった。被度はH23年度5%、H24年度10%、H25年度20%、H26年度40%、H26年度50%、H27年度60%、H28年度70%、H29年度80%と増加した。今年度も昨年度同様80%であった。
	毛陣礁池	50%	白化なし。2022年は白化率90%(死滅率5%未満)であった。 急激に落ち込む礁斜面の被度は60%から50%に減少した。礁池内は、直径60～100cmのクシハダミドリイシやコユビミドリイシ等の卓状ミドリイシ類が優占する。樹枝状のトグスギミドリイシ大型群体も散見できる。
	親川南	80%	白化なし。2022年度は白化率90%(死滅率0%)であった。 2010年の奄美豪雨災害により調査地点「親川」から約500m南東で大規模な崩落があり、土砂の流出や海底への泥土の堆積がみられ、崩落現場から100m以内では約半数のサンゴ群体に白化や死滅がみられた。その後サンゴは回復が進んでいる。被度は昨年度70%から80%に増加した。
曾津高崎東	80%	クシハダミドリイシ、コユビミドリイシなどの大型の卓状ミドリイシ群体が一面に広がっており、直径1m以上の大型群体も多くみられる。サンゴ幼生の供給源としても、周辺海域の回復を促す重要なサンゴ群集である。新規加入のミドリイシ属も多い。サンゴの白化の発生はみられなかった。被度は昨年度と同様80%であった。	

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
宇検村	外浜	80%	礁縁では被度が高くなり、クシハダミドリイシ等の卓状ミドリイシ大型群体もみられる。30cm程度の小型ミドリイシ群体も散見できる水路部でも部分的に卓状ミドリイシが高被度でみられる。白化やオニヒトデ食痕はみられない。被度は昨年度60%から80%に増加した。
	屋鈍崎	90%	2000年のオニヒトデ大量発生によってサンゴが壊滅した地点。礁斜面上部に、直径40～60cm程度のコユビミドリイシやオヤユビミドリイシ等の指状ミドリイシ群体や直径60～100cmのクシハダミドリイシ等の卓状群体が多い。白化やオニヒトデ食痕も見られないが、卓状ミドリイシの一部に病気(ホワイトシンドローム)がみられる。昨年度80%から90%に増加した。
	屋鈍	60%	2000年のオニヒトデ大量発生によってサンゴが壊滅した地点。直径30～60cm程度の指状および卓状ミドリイシ群体や樹枝状ミドリイシ群体が散見できる。オニヒトデ食痕はないが、部分白化群体がごく少数みられた。被度は昨年度50%から60%に増加した。
	タエン崎	90%	2000年のオニヒトデ大量発生によってサンゴが壊滅した地点。直径30～50cmのコーンボース状および直径1m以上の大型卓状ミドリイシ属のサンゴ群体が散見できる。浅所では樹枝状ミドリイシ小群落がみられる。白化やオニヒトデ食痕は見られない。被度は80%から90%に増加した。
	タエン	70%	2018年にハナヤサイサンゴ類やコモンサンゴ類、アザミサンゴ類、卓状および樹枝状ミドリイシ属群体に白化が見られたが、死滅群体は少数であった。クシハダミドリイシ等の大型ミドリイシ群体や樹枝状ミドリイシの小群落もみられる。被度は昨年度80%から70%に減少した。
	枝手久島北	60%	クシハダミドリイシ等の卓状ミドリイシ属が優占する。1m以上の大型群体も多くみられ、コユビミドリイシ、オヤユビミドリイシも多い。新規加入のミドリイシ属のサンゴも多い。オニヒトデ食痕や白化もみられず、健全なサンゴ群集が広がっている。被度は昨年度同様に60%。
	倉木崎	50%	直径20～40cm程度のコーンボース状ミドリイシ小型群体が散見できる。コユビミドリイシやオヤユビミドリイシが多い。ハナヤサイサンゴも散見できる。白化やオニヒトデ食痕はみられなかった。付着藻類が多く新規加入のサンゴは少ない。昨年の白化の影響がみられ、被度は昨年度60%から50%に減少した。
	船越海岸	60%	クシハダミドリイシ等の大型卓状ミドリイシ属が優占する。コユビミドリイシ、オヤユビミドリイシも多くみられる。新規加入のミドリイシ属のサンゴも多い。オニヒトデ食痕や白化もみられず、健全なサンゴ群集が広がっている。昨年の白化の影響がみられ、被度は昨年度80%から60%に減少した。
龍郷町	嘉渡	25%	コユビミドリイシ等の指状ミドリイシ属の小型群体がみられる。パラウネタケ等のソフトコーラルが優占する。白化群体なし。被度は25%に増加。
	円	25%	コユビミドリイシ等の指状ミドリイシ属の小型群体がみられる全体的にソフトコーラルが優占する。白化群体なし。被度は25%に増加。
	今井崎	40%	ソフトコーラル、ハードコーラルともに変化無く健全な状態。波当たりが強くニオウミドリイシ等もみられる。白化群体なし。被度は40%に増加。
	ハナゴイ	50%	ハラオハマサンゴ、ユビエダハマサンゴ、コブハマサンゴ群落が連なる。ミドリイシ群体は少ない。オニヒトデの食害無し、白化群体なし。被度は50%に増加。
	赤尾木	30%	砂地にハマサンゴが多く点在。ミドリイシ属群体も昨年度と変化なし。白化群体なし。被度は昨年同様30%。
	白浦	30%	コブハマサンゴは健全。樹枝状ミドリイシ属群体が多少増加。オニヒトデ食痕や白化群体無し。被度は30%に増加。
	戸口アーチ	25%	ミドリイシ属群体は少ない。ハマサンゴ、ソフトコーラルが優占。オニヒトデ食痕や白化群体無し。被度は昨年同様25%。
	戸口アウン	20%	ハマサンゴ、ソフトコーラルが優占。指状のミドリイシ属小型群体がまばらにみられる。昨年の高水温での白化で死滅群体が見られる。被度は20%に減少。
	ウマズハマ	20%	オオウミキノコやパラウネタケ等のソフトコーラルが優占。半球状サザナミサンゴ科群体や被覆状コモンサンゴ属群体がみられる。昨年の高水温での白化で死滅群体が見られる。被度20%に減少。
	戸口落水	25%	卓状のクシハダミドリイシ大型群体も少数みられる。直径30cm程度の指状ミドリイシ属が多い。オニヒトデ食痕や白化群体無し、被度は昨年同様25%。
	久場	20%	水深3mのコビエダハマサンゴは死滅状態。水深10mを越えるとリュウモンサンゴ群落、エダセンベイサンゴ群落が広がる。オニヒトデ食痕や白化群体無し。被度は昨年同様20%。
倉崎	25%	塊状ハマサンゴ優占。直径60cm程度の卓状ミドリイシ群体が多い。オニヒトデ食痕や白化群体無し。被度は昨年同様25%	
瀬戸内町	安脚場	70%	前年度と比べると、被度が増加した。
	黒崎	30%	前年度と変わらずだが、サンゴの再生も確認できた。
	実久	70%	前年度と変わらず。
	デリキョンマ岬	35%	前年度と変わらず。
喜界町	花良治沖①	60以上	白化1割程度。漁網が絡んで成長している。クシハダミドリイシ健全
	花良治沖②	60以上	水深-2～2.1mでクシハダミドリイシ群生。白化なし
	花良治沖③	60以上	水深-3～5mでアオサンゴ群体点在
	塩道沖①	40～45未満	白化が1割程度。水深-1.5mのソフトコーラルが若干白化あるが全体的には健全
	塩道沖②	55～60未満	全体的に健全だが部分的に白化確認
	塩道沖③	45～50未満	ソフトコーラル多い
	小野津①	40～45未満	指状のアオサンゴ群体確認。藻に覆われたアオサンゴ観察
	小野津②	45～50未満	アオサンゴ少、ミドリイシ点在。指状のアオサンゴ群体多い。

令和5年度サンゴ礁モニタリング調査結果

市町村名	調査地点	被度(%)	状況
	小野津沖③	45～50未満	アオサンゴ少、ミドリイシ点在。ハマサンゴの群体数多い
	荒木沖①	55～60未満	ハマサンゴ多い。白化なし
	荒木沖②	45～50未満	アオサンゴ群体多い。
	荒木沖③	45～50未満	全体的に健全。崖状の地形にアオサンゴ多くソフトコーラル点在
徳之島町	畦ビーチ	50～74	多少の白化が見られた。
	母間海岸	50～74	本調査時には白化及び食痕は見られなかった。
	畦ビーチ	50～74	本調査時には白化及び食痕は見られなかった。
	母間海岸	50～74	本調査時には白化及び食痕は見られなかった。
	畦ビーチ	50～74	上部が死滅しているサンゴが確認された。
	母間海岸	50～74	小さな食痕あり。
	畦ビーチ	50～74	食痕と弱白化が見られた。また死滅しているサンゴが確認された。
	母間海岸	50～74	本調査時には白化及び食痕は見られなかった。
	畦ビーチ	50～74	弱表面白化しているサンゴが見られた。
	母間海岸	50～74	本調査時には白化及び食痕は見られなかった。
天城町	千間海岸沖	0.52	河口付近は土砂の流入により死滅したサンゴが確認されたが他の水域では元気なサンゴが見られた。
	与名間灯台下	0.72	サンゴは健全に保たれており一面に広がっている。
伊仙町	検福	50～74	食害・白化現象が多少あったが、ユビエダハマサンゴ等生育良好。
	面縄	50～74	食痕あり、生育良好。
	喜念	50～74	食痕あり、生育良好。
	喜念(コバンシャ)	50～74	食痕あり、シコロサンゴ等生育良好。
和泊町	出花	25%未満	サンゴの状態は良好。
	イダシチ	25%未満	サンゴの状態は良好。
	ワンジヨ	25%未満	サンゴの状態は良好。
	西原	25%未満	サンゴの状態は良好。
知名町	沖泊	25%以上～50%未満	高水温のため前年より減少している状況である
	屋子母	5%以上～25%未満	レイシガイの影響により、前年より減少している状況である
	ウジジ沖	5%以上～25%未満	前年と特に変化なし
与論町	長崎沖(長崎の塔)	0.3	やや不良
	赤崎沖(礁斜面)	0.5	やや不良
	赤崎沖(礁池内)	0.4	やや不良
	皆田沖(礁池内)	0.2	不良
	茶花沖(ニュードロップ)	0.5	良
	茶花沖(宮殿東)	0.7	良